



## いじめと心理学

やってはいけない、あってはならないことですが、実際のところ、いじめは学校でも社会でも存在しています。この「いじめ防止」に向けて、心理学も様々な角度から取り組みをしています。

すぐ思い浮かぶのは、スクールカウンセラーが担任の先生と一緒に訴えをサポートしてくれる、というものでしょう。今苦しんでいる人の思いを受け止めて、どうしたらよいか一緒に考えてくれる、これは、心理学の分野でいうと「臨床」に当たります。それでは「発達」の分野では、どうアプローチするのでしょうか。

発達心理学は、私たちの行動や能力が、「どこから来たか」を考える心理学です。ですから、いじめが私たちの成長のいつごろから生じるのかを問題とします。いじめは、赤ちゃんでは、ありませんね。いじめをしかける「友だち」自体が、まだいません。幼児ではどうでしょう。物の取り合いなどを巡って、友だちとのケンカが、しばしば起きるようになります。保育所や幼稚園の先生が、「そんなことをしたら、相手はどんな気持ちになるかな？」と考えさせます。つまり幼いときは、他の人の立場で考えてあげる力が未熟なのです。小学生にもなると、攻撃をされたら嫌だろうということは、ちゃんとわかっていて、それなのに、みんなで示し合わせて仲間外れをしたりします。「だって、キモチ悪いから空気が悪くなる」などと言います。なんらか「みんなに迷惑な理由」があるから仕方ない、という理屈です。中学高校くらいになると、理屈があろうがなかろうが、いじめはよくないとわかっているけれど、「でも、いま止めようと言ったら、自分はきっとグループから悪く思われる」と計算して、動かなかったりします。成長につれ考えたり予想したりする思考力が育ち、仲間づきあいも発展するのと同時に、負の側面としてのいじめも「発達する」のですね。

成長して発達するものならば、もう、どうしようもない???

いえいえ、私たちのこころには「思いやり」「正義感」がありますし、ふるまいの中には「援助」もあります。やはり、成長につれて発達します。それらはいつから、どのように育つのでしょうか。人間らしい知恵の力を、うまく調整してよい形で発揮できるのは、どのような場合でしょうか。そこがわかれば、いじめを予防する取り組みにつながってゆくかもしれません。

心理学には、社会心理学や認知心理学、生理心理学や進化心理学など、さまざまな分野があります。いじめに対してどんな問いをもち、いかにアプローチをするのか、想像してみてください。

北原靖子（発達心理学）